

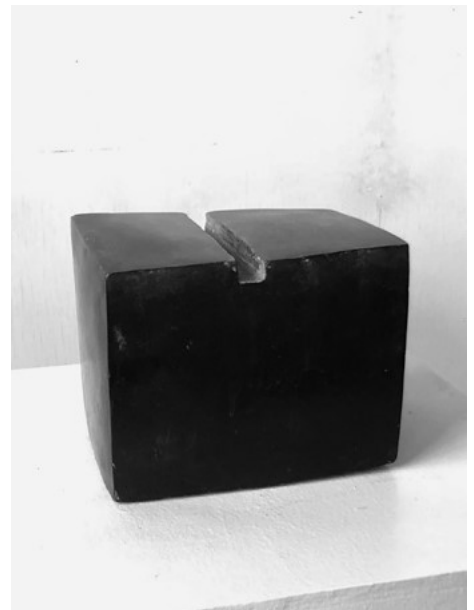
サントミュージゼ 上田市立美術館

シンビジウム3・2019年10月12日・11月10日

丸山 雅秋

彫刻が存在すること

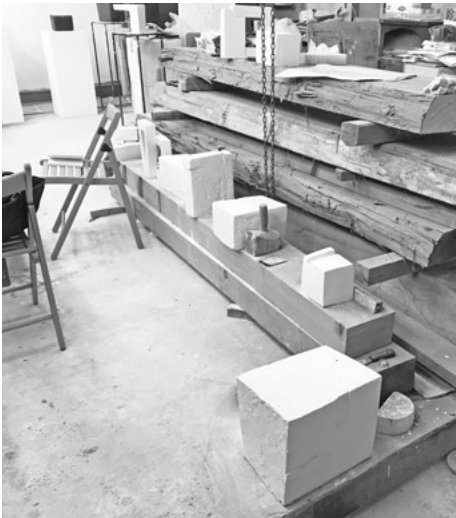
ブロンズの塊がそこに在る。大きくはないその塊は鈍く光を反射してそれぞれの面を見せている。直ぐに何かに捕らわれたように視線を外すことが出来なくなる。アルカイックともいえる全体像が見えてくる。一見幾何学的形態に見えたその塊を構成しているのは、内側から発せられているものを受け止め緊張を湛えた有機的な膨らみを持つ面だ。それぞれの面は僅かに傾き、浮かび、重力に抗うようにその塊を構成している。そして面と面がつくる線は静かに全体を定義する。上部には掘られたのではなく、そこに在ったかのような溝がある。溝の内側と外側の関係が生まれ、塊を取り囲む空間との新たな関係が生まれる。表面は複雑な様相を見せる。傷、色の変化、凹凸、手の痕跡、時間が封じ込められているかのようなのだ。その彫刻作品は、丸山雅秋のアトリエに在った。



丸山は1952年、長野県豊科町（現安曇野市）に生まれ、東京造形大学彫刻科で佐藤忠良に師事した。佐藤は「いい形には作用と反作用が働いている。」とっている。彫刻が10の力で地を押すと、地が10の力で押し返すこと、それが彫刻が「立つ」ことであるという丸山の理解に繋がる。さらに、「作品が表す基本的な力の軸や方向に対して、どこかにそれに反したり違ったりする軸や方向が見られると、その作品は微妙な均衡を保って美しく感じられる。」という。この微妙な均衡は丸山の作品にも見られ、佐藤との表現の違いを超えたところで本質的な共通点を見つけることができる。

卒業後はイタリア・ミラノのブレラ美術アカデミー彫刻科で4年間学んでいる。在学中よりミラノでグループ展に出品、卒業後、イタリアの市立美術館、ドイツの市立ギャラリーで個展を開催、その後、ドイツ・シュツットガルトで8年を過ごし、同国内で数々の展覧会に出品している。イルムトラウド・シャルシュミット＝リヒター（美術評論家）は「日本の文化は西洋的観点からすれば、まったく異質で、そのプライオリティーはまったく別種のものである。醸し出される雰囲気や情感、さらにまた、形態や表面の調和、これらへの研ぎ澄まされた感受性にその特徴を見ることができるが、そこには諸力の緊張関係から生まれるバランスが保たれている。それも、このバランスは精神的なものの表現にさえなるのである。これこそ、現代でも変わらない東アジアの、そして日本の芸術の本質だろう。」と丸山がヨーロッパ芸術に影響を受けながらも日本の芸術の本質を追求している点を指摘している。丸山はイタリアに渡った理由を、いままでの表現





丸山は安曇野の高い天井のアトリエで石膏型を制作している。手で石膏を盛り、削る。白い塊が幾つも置かれている。丸山は、アトリエのスケールが制作に影響するという。作品が大きく感じられる一因でもある。完成した石膏型は作品のクオリティを生む丸山が過ごしたイタリア、ミラノのブロンズ鋳造所に送られる。鋳造されたブロンズ像の表面は丹念に仕上げられ、丸山の希望に沿って酸を使い職人と相談しながら色付けを行う。そして日本に送られた作品が本展に出品される。作品が空間そして観者と新たな関係を築き、大きなボリュームをもつ展示空間にどのように存在し共生し場を創造するのか楽しみである。



小海町高原美術館 中嶋 実